

座談会

「こころの森」開設2年を振り返って

—その成果と課題—

汐見稔幸・白梅学園大学長（「こころの森」センター長）

小林美由紀・白梅学園大学教授

杉山貴洋・白梅学園大学准教授

石井知子・「こころの森」施設長

鈴木千佳子・NPO「HAGU」

山路憲夫・白梅学園大学教授（司会）

○山路 東村山市から東京都保健所移転後に「子育て関連の支援施設」として、白梅が引き受けてくれないか、という提案が2006年にありました。その後白梅を含め、市民による検討会を経て、2008年10月に、子育て総合支援施設「こころの森」がオープンしました。市が運営資金を出し、学校法人白梅学園が受託、運営は白梅と市民（NPO）が担うという、三者協働という形となりました。

この2年近くで、利用は多い日には300人を超え、さらに広がっています。保育園に通園しない0、1、2歳くらいの子どもと親を対象としたくつろげる場という狙い

が市民に受け入れられたようですが、課題もあります。「こころの森」開設2年を振り返って—その成果と課題—というテーマで座談会を催したのはそのためです。最初に「こころの森」の責任者でもある汐見学長から、当初の狙いとその達成度についてお話しいただきたい。

○汐見 もともと「こころの森」の企画を持ち込んだ東村山市は、子ども家庭支援センターとは少し異なる東村山市独自の子育て支援センターをつくりたい、ついては、どういうモデルがいいか専門家のいる白梅で検討してほしいということから始まったわけです。



当初は白梅が運営まで引き受けるということではなかったのですが、モデルを考えてほしいということでした。子どもを豊かな玩具環境やくつろぎの環境の中で遊ばせたり、親同士が交流したり、そして一般的によくいわれる親のさまざまな相談機能・学習機能、そういうものを持ったものにした。

もう少し子どもの文化的な活動、文化実践というんでしょうか、童話活動とか絵本活動とか、特に「アート」というのが一つのキーワードだったと思いますが、そういう体験を豊かにできるような子育て支援センターを構想できないか。

そのためには白梅の経験、幼児を育てるための美術系・音楽系・身体系のさまざまなパフォーマンスの経験のある人が入ると一味違う、単に子どもたちを遊ばせるだけではなく、さまざまな体験の深さが期待されたわけです。

限られた予算の中で、一つの柱であった「ひろば事業」、子連れで気楽に来て、暖かく柔らかな雰囲気の中で、親もくつろぐし、子どもたちも楽しく遊ぶ。親にはいつ

の間にか友達がたくさんできて、日ごろの子育ての疲れが癒されたり、新しいエネルギーが出てきたりという、そういう機能がかなりていねいに展開されていると思います。

雰囲気的にも、杉山貴洋先生にご協力いただいて、十分な財政のない中、柔らかな雰囲気のある場所をつくることでも、かなりうまくいっているのではないかと。そういう点でも、「さすがあの白梅がやっていることだ」というような成果が出てきたのではないかと思います。

相談事業も、専門的な相談は小林美由紀先生に来ていただいています。普段はあまり聞くことができないようなことも、ここなら遠慮なく聞ける、そういう思いを持っていらっしゃる方がかなり出てきて、あそこへ行くときいろいろんなことが相談できるので、そういう点でもいと思っています。つまり、そういう点での機能もかなり充実してきた。

それから、単に子どもたちを遊ばせるだけでなく、ときどきはイベントをやっていますよね。人形をついたり、親子で遊んだりという、そういうことについて年間計画を立てながら、一つずつていねいにやっていると思います。

始めてしばらくは、どういうことが可能か手探りだったと思いますが、石井さんを先頭にスタッフがいろいろ計画してくださり、参加者のニーズに合った、比較

的無理のないイベントを積極的に入れてきたという点で、この種の子育て支援センターとしては、相当多面的で、しかも参加者がリピーターになりやすい、そういう施設として定着し始めているという点では、非常に大きな成果が上がっているのではないかと。

課題ということでは、もともとの計画で言うと、一つの部屋をアートの部屋にするとかいろいろありました。だけど、そのためにはかなり充実したインストラクターがいないと難しい。目標を少し見直すのか、やり方を考えるのか等、考えなければいけないところをやつぱりある。始めてすぐわかったのは、4〜5歳の大きな子どもたちが来ると雰囲気はかなり変わってしまいます。そういう子どもたちを連れてくる人はちょっと参加しづらいんじゃないか。そのあたりは今後の大きな課題だろうと思えます。下の子は2歳だけ、お母さんは絶対出てきませんから、4歳、5歳の子どもたちが来づらいうと、やつぱり大きな欠陥になってい



汐見学長

く気がします。

場所的には便利などころにあるのですが、東村山市全体の中ではかなり遠くから来なきゃいけないという人、それから市外からもかなり来ているということ、もう少し分園というか分所というか、そういうものがあって、あまり無理しなくても行けるようなシステムをつくらないと、来られる人が限られてくるかもしれない。

それから、市としてはもう少し母親の学習機能を高めてほしいとか、子育て支援のための支援者の養成システムをつくってほしいとか、一時預かりをやつてほしいとか、いくつか要望がある。それはそれでまた人が必要です、準備も必要です、アフターケア等も必要ですので、それはワンランク上の課題としても一回考えなければいけない。

そういうものが残っているとは思いますが、大きな枠ではかなり奮闘しているのではないかと。

○山路 ありがとうございます。課題まで出してくださりましたが、全体としては、かなり評価できるんじゃないかというのが汐見先生の評価ですね。

次に、実際に現場で施設の責任者としてやってこられた石井施設長からごらんになって、途中経過も含めて、どんなふうにとらえておられるか、利用状況も含めてお話し下さい。

増え続ける利用者

○石井 平成20年から21年3月までの1年半の報告の中では、1日平均170人の利用者が来ていますが、22年度になって4月から6月でまた増えてきていますね。4月は平均156人、5月は193人、6月が221人、7月1日から13日までが238人で、本日に300人を超す日が増えてきています。

7月1日から13日までの9日間で、2148人来ているので9日で割ると1日あたり平均238人です。

ちなみに、きょうの新規の方がどんな割合か見てみましたら、東村山の方が3件、小平が5件、国分寺が3件、東大和が1件、所沢が1件でした。最近では東村山よりも、口コミで小平とか国分寺とか東大和とか所沢の方たちがすごく増えている中で増え続けているという現象がある。

西東京市の子ども家庭支援センターの掲示板に「ころころの森」のことが宣伝されていたり、東大和ではお母さんたちが個人でやっている子育て情報マップみたいなところで紹介されていたり、所沢から来た人は近くの公園での口コミとか、いろんなことで増えています。

本日もいらした小平市のメンバーの4、5人のグループの方たち同士で、「きょうは本当に楽しかった。どう

もありがとう」と、紹介してもらったことに対して言っていました。そんなふうには気持ちよく帰っていく光景が見られるようになっていきます。

特に6月ぐらいからはすごく増えだして、300人を超えるようになりました。去年も他市は多かったんですが、このところ非常に他市が増え続けていることをどうとらえたらいいか、すごく困っているというか悩んでいます。

東村山の方は、0〜2歳児が使う場所だということをだいたい認識してくれているんですね。本日も0歳、1歳、2歳が大体30人から40人と同じような人数が来ているんですが、他市の方たちが多いと、2歳を含めて大きい子たちが多くなって、そういう子どもたちは使いがよくわからないというか、来てみると小さい子優先の施設なんだと理解してくれているんですが、他市が多くなってくると、そこを理解してくれない部分も出てくるんだなと感じています。

もちろん他市の方でも、問題を抱えていて来る人とか、ここがあつてよかったなと思う人たちもいるので、すべてをシャットアウトする気持ちはないのですが、口コミで集団で利用されるのが加速してくるとちょっと困るというのが現場の率直な気持ちです。

やっぱり来ると、広くて明るくてきれいだという印象をどなたも持ってくださるし、小さい子を持つ保護

者にとつては安心できる居場所になっている。ほかの市では小さい子の居場所がない。やはりこういう小さい子優先の施設が増えていかなくはないけないというのはいらしたお母さんたちの声です。

多くの人が集まれる広いスペースは出会いの場になっているし、交流の場にもなっていて、利点は大きいと思います。土曜日には家族で遊びに来られる場になっていて、パパが30人以上来ることもあります。土曜日にはたいいてい20人前後のパパが来られます。きょうみたいな普通の日でもパパが7人こられていて、前は普通の日にはパパの姿は見なかったんですが、最近は3人とか4人とかいらして、パパたちが来るのは土曜日だけではなくなっています。

○山路 自営業の方とか、サラリーマンの方ですね。

○石井 そうい感じですね。それは実感しています。あと、祖父母が孫を世話をする場にもなっているかなというのと、双子を持つお母さんや、0歳と2歳のきょうだいを持つお母さんとか、親にとつても一息つける場所として活用されていると思います。

最近では、発達障害の子や気になる子を持つ親も増えていきますので、相談に乗ってもらえたり、サポートしてもらえたりする場として頼りにされている。小林先生

の「ひまわり会」でも、そういう子どもの親御さんが相談に来られているのを見ていたので、そういう場としても頼りにされているのではないかと。

小さい子の居場所としては、児童館や公民館では対応が難しい。そういう0歳、1歳の子がのびのびと遊べる場として喜ばれている。その結果、生活のリズムが整って睡眠も深くなり、生き生きとした子どもになっていくということ、来るたびに顔の表情が変わっていく子どもたちを見ると、小さい子の居場所としてやっぱり大事にしてあげたいなど。

玩具も、木のおもちゃとか手づくりのものがいっぱいあるので、子どもがよく遊べると好評です。そのへんは白梅の学生や白梅保育園の大山先生のお力を借りて、揃ってきたことが今の場所をつくっているんだなと感じています。虐待予防の場にもなってきたているかなと思っっています。お母さん同士のつながりとか、スタッフとの関係で、気分転換



石井施設長

になったり、ほっとする場が生まれているというのは、いろんなところで聞かれます。

先日も東村山市に実家がある、稲城市に嫁いでいる1歳の男の子のお母さんが非常に暗い顔で入ってきて、ここは相談できるところかと聞かれたので、6月に1歳になったばかりの男の子と3人で私がお話を聞いたんです。お父さんが警察官で1週間家に帰ってこなかったりというので、非常に孤独な感じで子育てをしている中、だんだん自分を追い詰めていったように感じました。

非常にまじめで本当に几帳面なお母さんだと思ったので、アフリカのことわざに「1人の子どもには100人の支援者が必要だ」という言葉があると言いましたら、その言葉が非常にお母さんを励ましたみたいで、子育てというのはそれほど大変で、自分に力がないためではなかったんだとわかって吹っ切れたようで、その日は来なかったんですが、明るる日に来たときには、気持ちでこんなにも変わるものかと本人も驚くぐらいに変わって、明るい顔になっていました。

その方は2日間遊びに来ましたが、子どもの表情がどんどん明るくなっていくのを見たときに、やっぱりこういう施設ですごく大事なんだと感じました。

市民と共につくっていく施設を目指しています。多世代の方の応援で支えられています。先日七夕会というプログラムをやりました。お母さんたちが主体になっ

てプログラムをつくりました。ピアノができる方、ホルンができる方、オペラの歌を歌える方とか、そういう技を持っているお母さんたちが中心になってミニコンサートみたいなことをしました。

お母さんの中には幼稚園の先生がいて手遊びができたり、普通の方でも紙芝居の見せ方が上手だったりして、7人ぐらいのお母さんたちが中心になって七夕会を設定したんです。本当に普段は見えないようなお母さんたちの表情が素晴らしかったのと、そんなに宣伝はしなかったんですが、200人近い方が集まりました。今度はお月見会をやりたいねという声がお母さんたちから出ていました。

ほかにも楽しかったことでは、市外の方にも協力していただいて、手作りおもちゃとか、折り紙コーナーとか、当事者の若いママたちもそういう形で参加してくれるようになってきました。

○山路 ありがとうございます。お母さんたちが非常に喜んでやっているというお話でしたね。それに関連して、鈴木千佳さんのところの「HUG」ではお母さんたちへのアンケートを2009年末までいただきましたよね。そのアンケートを受けて、お母さんたちはこの「ころころの森」をどんなふうにご利用しているのか、それを話していただけますか。

評価は高いが、課題も

○鈴木 佐久間路子先生が分析してくださったのですが、基本的にはいま石井さんが報告したことを裏づける数字が出ていると思います。

満足度についてはほとんどの人が満足していて、五段階で5を付けた人がほとんどなので、やはり満足度は非常に高い。

その中身については、やっぱり子どもがよく遊ぶ。「こんなに遊んだのは見たことがない」「こんなに生き生きした顔を見たことがない」「こだとすぐよく遊ぶんです」等がほとんどで、結果、自分も気が抜ける。子どもが生き生きした時間を過ごしていると思うことで自分もほっとできるんだと思います。どんな質問をしても、おもちゃの充実とか、いろいろ項目はあるんですが「居心地がいい」という部分で評価が高い。

あと、どのような形でこの施設を知ったかということでは、やはり口コミが圧倒的です。ホームページや「おたより」も出していますので、もちろんそれもありますが、子どもが生まれたばかりでは、紙を見てすぐに行こうとなるのではなく、お友達から「いいところがあるよ」と言われて来るというふうになっているんだと思います。

当初は市報にも載りましたし、だいぶ宣伝したつも

りでしたが、それでもPRは限界があって、知らない人がやっぱりいたんですね。口コミの効果は大きい。

他市が増えているのも、他市には紙媒体は行かないので、圧倒的に口コミだと思います。口コミで来る人が多いということは、これからも増える可能性が高いと思います。口コミのほうが増員力が高いということはアンケートにも出ています。それを考えれば、他市がどんどん増えていくことは確実です。

300人の日はやっぱりすごいですよね。しかも、遠くから来ている人は帰らないんです。その日一日ピクニックのつもりで来ているので、一日いるつもりで来ているんです。グループで朝から最後までいるつもりで来ているので、どんなことがあっても帰らない。帰るのは、近くの人が帰るというふうになってくると、市内の人たちの満足度が下がっていくことにつながるの非常に危険だなと感じています。

それと対応について満足度が高いというのは、もちろんそれぞれ個性がありますので、合う・合わないとか個性の違いがありますが、基本的にすごく評価が高いので、現場に出ている非常勤の人たちの姿勢を評価したいと思います。

労働条件は決しているとは思わないんですけど、その中でスキルをつけていっている。出てくる課題は毎日の視点のところからで、日々悩みながら努力して

いることが満足度に反映されているんだなと感じます。そのへんが評価される体制がとればいいなと本当に思います。そういう人材って、手放すと本当にもったいない。当初からいるスタッフが継続して勤務できる体制がとれたらいいなと、思っています。

あと課題としては、市から要請されている問題があります。やはりいま現場が力を入れている部分がこれだけ評価されて、これだけ人が多く来ていると、広場にすごく労力がかかっている。市のほうから子育て支援包括事業の充実、気になる子への支援の件、さまざま課題に対して十分に対応できる体制がとれていないと思います。

これから広場以外の対応を増やさなければいけないとなると、300人も来ているとちょっとできないというか、バランスが非常に大きな課題になると思います。

そのところは、利用者アンケートにはなかなか出てこない部分です。全体像をどう評価していくのかというあたりは利用者アンケートからは出てこない部分なので、どうしたらいいのかと感じています。そのへんが表に出ないで、単純に広さ×力の差というふうになってしまうと、マイナスの印象を受けてしまうので、そのへんのバランスは難しいなと思っています。

あと、七夕会がすごくいい形でできた。利用者の力をエンパワーするような、単純に受け入れるだけでは

なく、ボランティアの受け入れとか、一緒にやっているということはずごく手間がかかることでもある。そのへんについても受け入れ体制の問題が今後の課題になると思っています。

○山路 ありがとうございます。課題はまだまだあるということですね。

後ほど改めて議論していただくとして、汐見先生から冒頭にあったように、我々が引き受けた狙いの一つは、白梅らしさをいかに出していくのか。現実には市民が大学と関わることのメリットを求めているところがあった。我々としてもできるだけいろんな先生に関わっていただいて、白梅らしさを出していこうということとやってきたわけですね。

その一つが、小林先生に担当していただいている「相談」です。特に障害のある子どもたちが増えているというお話が石井さんのほうからもありましたけれども、それも含めて、親たち・子どもたちのニーズにどう応えてきたのか、応えていけばいいのかということについて、小林先生のほうからお願います。

増える気になる子の相談、支援

○小林 最初に、この相談というのをやるにあたって、

例えばいろいろな発達支援とか支援センターがやっているような相談とは違って、特に相談があるから来たわけではないけれど、ここにいらっしやるスタッフの方が気になる方や、何となく何かありそうだなという方に「ちょっと相談してみたら」というように声をかけていただいで、私にご紹介いただくというような形で、相談というよりは、ただ一緒にお話をするという形でやっています。

そのときに、お話しする場所が、普通は相談というと構えてしまつて、話をしている間にも、小さいお子さんですと「お母さん、そんなに話ばかりしていいないで」となるわけですが、広い場所でお子さんがのびのびと遊んでいて、お母さんから離れていけるような場所でご相談をすると、お母さんも本当にゆつくりとお話しするし、お子さんはお子さんで、お母さんから離れてほかのお友達と遊んだりしてのびのびとしている。

お家ではお母さんとうまくいっていないと言っているけれども、実はお子さんはいろんなことができるんだというのが目の前で展開できるんですね。目の前で展開していくと、お母さんたちもなるほどという感じで、お互いにとつて、一生懸命育てようと思うお母さんほど悩みが深くなつていく傾向があるので、実際には子どもは十分のびのび育っているし、立派に育っているんだというのが見れることによつて自信を取り戻している

く。そういうようことがだんだんできてきている。

相談といつても、実はどんなお母さんでも何か聞きたいと思ふことを持つていらっしやるんですね。特に「ひまわりの会」だけでなくて、「つくしんぼの会」といって、毎月身長と体重を測るということをやっている。そこでもまず保育士の皆さんとご相談して、その次に私のところに来るといふ形でやると、本当に時間が切れないぐらいどんどんあつて、例えば寝かせつけ方、離乳食の食べさせ方、その一つひとつの中に、いろんな子育ての悩みとか何かが織り込まれているわけですね。

そのあたりのお話をしていただけでも全然違うんですが、もしその子の発達で気になることがあつたり、あるいはお父さんからいろいろ言われて悩んでいたりしたら、最近はおじいちゃん、おばあちゃんとの違いぐらいでしたら何とか乗り切れるお母さんが多くなつてきました。お父さんから言われると、どう対応したらいいか悩むお母さんがいらっしやるんですね。

そこにほんの一言、二言言つてあげるだけでも、お母さんの気持ちは違つてくるし、そうすることによつて、お母さんが子どもを見る目も違つてくる。そういうことがここでもずいぶんありました。

ただ、最近はお母さんが増えてきたお子さんというか気になるお母さんが増えてきたお子さんですね。私のやることは、その気になるところを気にしていただ

くというよりは、もちろんその中でももうちょっと自信を持ってお子さんと接触できるようなことを言ったりはしますが、医療機関なりそれなりの機関につなげていかなきゃいけないようなお子さんも何人か見受けられて、そのあたりはまだきちんと連携ができていない。ご家族に任せているというところが少し問題かなと思っています。

そのうち連携してやっていかなければいけないだろうし、そういったお子さんというのは一回限りのご相談ではなく、ある程度継続して見ていかなければいけない。そういうことを積み重ねていかないといけないだろうと思うので、そのあたりが今後の課題かなと思います。

実際に、相談のことも含めて、「ころころの森」があるから近くに引越してきたなんていう方もいらっしゃると思いますよね。それで毎日通ってくる方もいらっしゃるのです、そこまで生活の中の一部として捉えている親御さんもいるんだなと。

実は2歳以下で親ひとり子ひとりのような閉鎖空間で育てていらつしやるご家族は追い込まれやすいという現状が、「ころころの森」がこんなにまで受け入れられている背景にはあると思うんですね。その裏返しだと思っんです。

本当はその年代というのは、お子さんが一番発達し

ていく年齢ですので、子育ての中で一番楽しい時期です。子どもの育ちぶり、成長が見られるので。ところが、お母さんたちにはそのゆとりがない。子どもが育っている姿を見るゆとりがなくなってしまうっている。その部分が日本のお母さんたちの「子育ては楽しくない」ということにつながっている。実はその部分が本当は一番楽しいんだよということ伝えていくと、お母さんもと気がついて、一番楽しい時期を過ごしている気持ちになれる。

ある意味で、「ころころの森」が、もつといろんなところに広がっていききっかけになっていかないと、あそこだけですべてを引き受けるのは難しいと思います。そういう意味でも、ほかの市にもちょっと、学びにきてほしい、きっかけとしてつながっていくといいなと思います。

○山路 ありがとうございます。

杉山先生には「ころころの森」のひろばのイメージ



小林教授

づくりというか、デザイン、内装、それからワークショップにも関わっていただいて、「ころころの森」の特色をつくる大きな役割を果たしていただきましたね。

大きいワークショップの役割

○杉山 そうですね、ひろばづくりを目指したデザインということですが、先ほど汐見先生からお話しいただいたように、子育ての空間というのは、やはりあたたかさというのがテーマになっています。これが使用前の写真です（笑）。僕も初めて見たときは、ちよつとびっくりしたんですね。

非常に圧迫感があるのと、若干天井が低いので光が曲がらないんです。それとオープンスペースとして一番致命的な柱がある。これがデザインの課題になったわけです。これをどういうふうに解消するかということで、このシンボルツリーをつくった。これは換気・空調で、逆光で光が洩れるので、それによって空間が膨らむように設計してあります。

あそこから入っていくと、いちばん最初に逆光でイメージが湧いて、このスリットから洩れるので、天井の圧迫感をかなり和らげることができる。それと共に、これが逆光の写真なんです。歩くと光に変化があるので、入ったときに完全に閉じてしまうと視線が止まって

しまうので、このすき間を開けておくことで、奥のスペースまで視点が回るといふふうに設計されています。

これは新しくつくったパンフレットです。ハイハイの子が遊具の中で遊んでいます。小さい子がちよつと動いたときに、光が動くのでけっこう楽しいんですね。あまり過激な遊具は0〜1の子どもには合わないというのと、ここに椅子がありまして、このスリット越しに、例えば「いないいないばあ」をしたり、ちよつとしたかくれんぼをしたり。完全に見えない「いないないばあ」より、こういうふうにやるほうが意外と飽きないんです、面白いんです。

僕が指示を出せるところには全部、天然の亜麻仁油を使ったオイルを塗らせています。ですので、嚙んだり舐めたりしても平気になっています。長く使っていたくスペースということなので、メンテナンスをすれば、それこそ一生使えます。

こういうのは木じゃないんですよ、木に見立てた何かです。これは本物の木です。そこに子どもの手垢とどうか、お母さんとかがベタベタ触ったものが風合いになっていく。そこらへんまで考えて設計をしました。

僕は小平市なんですが（笑）、子どもを連れていきながら、お母さんたちがどんなふうにご利用しているのか、お母さんたちがどのくらい遊んだり、ツリーを通じ

て関わるということをやっていて、けっこう飽きないでやっているみたいですね。そのあたりはとてもよかつたかなと思っています。

○**汐見** これは座って遊んだりする役割と、部屋の空間をこれでうまく分けてくれているんですね。それからデーンとしたものがあるので安心感があるんですよ。これは不思議ですよ。大きな木があると癒される感じがするじゃないですか。あれとよく似た感じで、部屋全体がこれがあることですごく落ち着いている。なあと、なんか落ち着かなくなるといいますか。それはいつもなるほどなと思って感心していました。

○**小林** ここに子どもたちがつくったものが置いてあって、あれはいいですね。お金をかけてつくったものよりはるかにいい。

○**汐見** あれはワークシヨップの成果ですね。

○**石井** あれはオープンする前につくったものですよ、ワークシヨップで。市役所でやったんです。あれはまだまだにみんな好きですよ。あのくるくる回るのを見て……。

○**杉山** やっぱり子どもが作ったものというのはユニークで、無垢な感じがいいですね。ああいうもので空間を彩るといふのを、当初いろいろ考えていた案で使われたものです。木がセンターにあるので、ワークシヨップが年4回、一応そこで作ったものを飾って、季節感を感じてもらおうという試みもしています。

○**山路** ワークシヨップもこれから定期的にというか随時やってはまた飾っていくという感じで、それも「ころころの森」の一つの持ち味といふか特色になつていくわけですね。

○**石井** この間のワークシヨップでカオル君（仮名）に2回やっていただいたじゃないですか。

○**杉山** 実は、僕が参加したとき、見てすぐ、あ、この子は気になる子だなと。気になる子といふか、なんか持っているなといふか、非常に多動だなと。

ところが入ってきたときには、こっちが準備をしていなかったのでもうまく対応できなかったんですね。お母さんも子どもはすごく好きで、だけど、ワークシヨップのときに、あまりにも自分の子がほかの子と違つてうろろろしているの、泣いちゃうんですよ。

で、あ、しまったなと思ったんですけれども、全体

のことを考えると……。事情を聞いていたらできたんですけれど、それができなくて。でも、そうはいっても終わるころには、お母さんも笑ってクルマができて帰っていったんですけれどね。

○小林 クルマをつくる回だったんですね。

○杉山 次回はこっちが完全な準備をするのでまた参加してください、というふうにしてまた参加してもらったんです。

そのときには、ワークショップが始まる前からうちの学生をマンツーマンでつけて、始まる前からちゃんと関係をつくって、子どもと約束事をつくって、それで参加したんですね。お母さん、ちょっとでいいから休んでいてくださいと。初めてでしたから向こうで涙を流していたらしいです。

○石井 思いがけずひとりだけでコーヒーを飲みに行けて、それもお母さんにとってはすごく嬉しかったし、離れても大丈夫だったということで二重に……。すごく感謝していました。

○杉山 そうなんです。戻ってきたら、子どもが落ちていて作品を完成させている。お母さんは、今まで子

どものそういうところを見ていなかったもので、喜んで帰っていきました。

○杉山 こういうワークショップというのは時間をかけて、やはり知恵とかアイデアで勝負するしかないと思うんだけど、長くやっていくと、今のことも白梅の専門性といったら変ですが、それと地域の力が結びつきたい例だと思うんですね。大学が子育てを応援していく形というのはすごくいいんじゃないかと思いました。

○石井 別の人で、東村山市でそういう気になる子どもたちを支える会のお母さんの会がこの1年ぐらいにできたらしいんです。その人がこのあいだ訪ねてきたんです。白梅のほかのワークショップに参加して、そこで知ったらいいんですが、9月にあることをお伝えしたら、もしできればそのときに参加したいといってきました。白梅のそのやり方にすごい共感・共鳴していました。

○杉山 最近まちを歩いていると、子どもに「あ、スギ先生だ」といわれちゃうんですよ（笑）。講演をお願いされたり、本当に知っているんですね。

○山路 イメージですね。しかしそれは「ころころの森」が広がって、喜ばれているということですよ。

○石井 というのは、そのお母さんがおっしゃるには、そういう子どもだけじゃなくて一緒にやれるワークシヨップのやり方をすごく喜んでいらっしやるので、そこだけはせめてやろうかなと。一緒にやるということに興味があるんだなと感じました。

○杉山 カオル君の例を山路先生とお話ししたことがあるんですけど、そのときに、障害のない子のお母さんはどういふうに反応するかみたいな話になったんです。うちの学生はだいたい経験があつて、多動な子とか脳性マヒの子といろいろ関わっていたりするので、事前に知っていればほとんどわからないです。それぐらい、やっぱり知恵というか、こっちの準備で何とかなるものです。障害のある子とない子で、楽しくてわかりやすい活動をすれば絶対一緒にできると思うんですね。

○石井 カオル君の場合、すごく悩んだお母さんが、言葉が出ないといつて汐見先生に相談していたんです。結局言葉も出るようになったし、今は字も読めるようになったんですよ。平仮名も片仮名も一緒に読めるよ

うになつて……。

○汐見 4歳で？

○石井 そうなんです。だから、そういうことに出合えて、お母さんは多動性につき合いながらやっているのですごく大変なんだけれど、でも反面、「もし預けちゃつたらそういう喜びはもらえなかったからよかつた」みたいなこともおっしゃっているんですね。

○汐見 もう一つ付け加えると、この間ある大学の先生が、白梅高校に高校訪問で来て、そのあとで、学長先生いらっしやいますかといつて僕のところに来たわけね。そうしたら、「お礼に来ました」と言うんですよ。何ですかと言つたら、妻が困っていたけれど、「ころころの森」でお世話になつたと、お礼を言うんです。そういう場合はもつと、例えば土日だけでもいいから自然の中に連れ出して思い切り遊んだりしたほうがいいですよ。そういうのをやっている幼稚園のような



杉山准教授

ところもあるからと言ったら、本当に行っちゃったんですよ。そうしたら見違えるように変わってきたって言うんです。

○石井 そうそう、本当に行っただけですよ。

○汐見 それでずいぶん変わったと。僕はちよこっとそんなことを言っただけだから……。でも、一生懸命お礼を言いに来てくださって。

○石井 本当に煮詰まって、どんどん煮詰まって……。

○汐見 だから、ちょっとしたことでもそうやって変わってくれるというのは本当にうれしい。みんな相当追い込まれているんだよね。

○山路 「ころころの森」はそれに応えてきつつあると。そういうことですね。

○汐見 そうですね。

三者協働の意義

○山路 「ころころの森」の一つの特徴として、三者協

働というところで、行政がお金を出し、それを学校法人の白梅学園が請け負い、実際の運営には、もちろん行政が協力しながらも、白梅とNPO、市民の方々に一緒に参画していただいて、三者協働というのが実現したという、それが一つの大きな柱になったわけですね。その三者協働の意義と、市民、NPOが果たした役割についてどんなふうに評価できるのか。

○汐見 これはかなり大きな意味があつて、例えば子育て支援等で先進国といわれている国がいくつあつて、我々の仲間はカナダとかニュージーランドによく見学に行くんですが、カナダでは、例えば父親支援の取り組みを始めますと国が決めても、具体的にどうするかは全部市民から募集するんですね。

市民から募集した案の中でいちばん面白そうだというのを選定して、そこにお金を付けたり、さまざま条件を整えてあげたりするというのを国がやったり市がやったりするわけです。でも、やるのはあくまでも市民なんですよ。それをバックアップするのが行政で、それが民主主義だと。

自治体プランをつくって、「さあ、やりますから来なさい、来なさい」と言うのはほとんどないという話です。やるということは決めるけれど、案は市民から募集するのが普通だと。

カナダでは児童福祉スポーツセンターとか何かはみんななそういうふうにしてNPOがやっていて、それを評価しながら、アセスメントしながら、きちんと財政的な支援とか行政的な支援というのをやっていく。

日本の場合はある種のメリットというのか、追いかけていく段階で、とにかく国や自治体がモデルをつくて、それに市民を参画させるという形態をとってきたじゃないですか。だから、いつの間にか、形は整うんだけれども、お上にやってもらうというのが強くなって、自分たちが頑張れば形はつくれるんだという自信を持ってない国になってしまった。

今回は、そこまではいかないけれど、一応東村山がやりたい。だけど形は大学でつくってくれと。そこに市民が入ってきた。だから、市民と大学でプランをつくったという点では、従来とは違うパターンが始まったと思えましたね。

それで、今は専門性のある大学や、そこにもっとさまざまな市民がアイデアを持ってきたり、あるいは人材を提供してくれたりということをやれば、カナダが言っている民主主義みたいなものに近づいていく。そういう意味では、新しい形というだけではなく、歴史的に大事な意味を持っているのではないか。だから僕らが上手にやるのが期待されていると思いますね。

○山路 きょう来ておられる鈴木さんとかNPOのスタッフの方には運営にも関わっていただいていると思うのが一つの大きな特徴です。実際原動力になってきたと思います。当事者である市民の鈴木さんは、どんなふうにごらんになっておられるのか。

○汐見 今回はちよつと違っていて、こういうのをやるというところから始めるのがNPOの普通の形態なんだけれども……。

○鈴木 だから市民がやって現場がNPOという場合だと、三者というののはわかりやすいんですけど、職員は白梅で、NPOがその一角というふうに言えるのかどうかちよつとわからないんです。

実際には、「HUG」のほうから私が1人出ていて、「すずめ」のほうからは松本さんというスタッフを出していますけれども、立場は白梅の職員なので、結局「すずめ」のほうからは千葉さん1人が出てきている形です。ウエイトも小さいし、金銭的な役割も少ないので、それが協働ということなのか。

何をもちて協働というのかというところはすごく難しいし、全国的に見ても過渡期というのか、そういう部分はあります。それぞれが納得して、うまくいっているよねという状態にまでは来ていないと感じています。

ただ、前段というか始まる前の準備段階のところから関わらせていただいたので、現場の方とも話が率直にできる。NPOと現場の関係性は悪くはないと思っています。こちらは市内での子育て支援の経験がありますので、ここではこういう感じの事業展開をしたほうがいいのではないかと、言える範囲のことは少しはあるかなというか、できる範囲のことをしてきたという感じですよ。

大きいNPOの役割

○山路 ただ、鈴木さんは多少過小評価しているところがあって、学校法人白梅学園というか大学の教員も含めて、弱点の一つはマネジメントの問題なんです。そこは実際の子育てNPOの方々、鈴木さんもそうだし千葉さんもそうですが、やっぱりマネジメントに通じておられるというのは大学にはない強みなんです。その点は、ずいぶん助かりましたよね。

○石井 助けられています。地域をすぐくわかっていらっしゃる。

だから地域がわからない私なんかは本当助けられたなと思っていて、NPOの方たちが入っていないかあったらどうだったかといったら、今の「ころころの森」と

は全然違ったのではないかなというぐらいに思っています。会議も職員会議も一緒に、人数的には少ないとおっしゃるけれど、でも、同じような形で率直に、現場の人と同じ視点で入っていただいています。

そういう意味では、さつき汐見先生がおっしゃったように、プランとかそういうことでもちゃんと関わり合って、東村山市ではこういうふうにしたらいいという意見を出していただいて、ずいぶん助けられてきているなど実感しています。それがNPOの方たちサイドからいくと、納得のいった十分なものとこの部分は、ちよつとわからないんですけども。

○鈴木 私個人というよりはNPOの性格上、市内だけではないですけど、子育て環境をよくしたいということがあって、別にうちの団体をアピールしたいということではなく、同じやるなら、本当に有効なものになってほしいという気持ちが強くなってやってきたかなと思うんですけど、これだけ評価されればよかったです。と思います。

○汐見 たぶん、全国的にもこういう形のものはないと思うんですよ。

今は、例えば福祉をやりたいというときに、誰にそれを委託するかというと、いくつかパターンがあって、

第三セクターに頼むときもあれば、保育園の園長会がつくったNPOにさせることもあれば、かなり多いのは自治体が直接運営するというやつですね。

そういうものではなくて、初めて大学に委託してきました。これも珍しいですし、それはその専門性を生かしてやってほしいということ、私たちは経済的には何の利益にもならないんだけれど、大学の社会貢献活動というのはいろんな意味で大事になってくると考えて引き受けたわけですね。

ただ、私たちにはある種の専門性はあるんだけど、市民のニーズだとか、市の歴史の中で蓄えられてきたものとかをていねいに掴み、それを大事にしながらやっていくということのノウハウが全くないわけです。

だからそこにNPOが、NPOといってもこれを担うようなNPOではなく、これまで市の中で子育て支援をやってきたようなNPOの方が運営に参加し協力する形で来てくださるのは、白梅としてもものすごく助かっているというのが実態なんです。

もっと別な形に発展していくことも今後は考えられますけれど、今のところNPOの方々には不満もあるかもしれないけれど、結果として見れば、全国にはない、新しい形を少し具体化できているのではないかなと思っっているんですけれどね。

他市にも作ってほしい

○山路 まとめに入りたい。

強調しなくてはいけないのは、東村山市という財政状況があまりよくない自治体で、こういう今までの自治体にはないような子育て総合支援施設をつくってくれた、お金を出してくれたというのは画期的なことだと思っんです。

担当の中島課長(当時、児童課長)と私たちが常に言っていたのは、保育園に行っている子ども以外の子どもや乳幼児の親たちは自治体・国から何のサービスも利益も受けていない。しかも子育ては孤立化して悩みも多い。大きな悩みを抱えている親たちがいっぱいいる。それに対して私たちは何もしてきていないじゃないか、何かやらなくちゃいけない。その思いに東村山市は応えてくれたわけです。

さっきの課題の話にもなるんですが、市外からこれだけたくさん来ているというのは、東村山市よりむしろ財政状態がいい自治体が周りにいっぱいあるのに、なぜそういう潜在的なニーズを受け止めないのか。すべてが「ころころの森」のような形にする必要はないかもしれないけれど、保育園に行けない、行かない親たち、子どもたちの居場所づくりをやらないのかは最

大の問題だし、その必要性を「ころころの森」をこういう形で作ったことよってアピールできたのではないか。そういうメリットもあるのではないかと思うんです。どうでしょう。

○鈴木 あると思います。他市から来ているお母さんたちが、うちの市にもつくるよう言ってくれと言いますよ。

○山路 結局、汐見先生、やっぱり市内のニーズもこれからはどんどん増えていくだろうと思うので、ほかの市がなぜつくらないのかという話ですよ。

○汐見 だから僕らが言いに行かなきゃいけないんですよ。(笑)。

これは拒否するわけにはいかない。だけど東村山市の市民が利用しづらくなっていくのも見過ごすわけにはいかない。解決策は小平市につくることだ、所沢につくることだ、それしかない。ノウハウは売りますと(笑)。

○鈴木 ただ、資料はたくさんできていますけど、専門性の高きみたいなことあるのかなと。いろんな人が相談をきたたり、信頼関係があることがすごく大き

くて、ひろばの事業ではよくいろんなことをポンポン受けることがあるので、言い方は悪いですが、そうなったときに、単純にただの居場所になってしまふ。

もちろんそれも大事なんですけど、そういう小さなひろばはたくさんあると思うんですよ。

そういう中で「ころころの森」はやっぱり信頼されているなと思います。相談しやすいとか、やっぱりリスクの高い人たちが多く利用しているということは、ほかの市のひろばではあまりないことなので、そのへんが評価されているんだと思うんです。

○汐見 僕はやっぱり白梅が引き受けて、先生たちがこれまでもいろんな形で関わり、すべて細かなところまで配慮されていると思うんですよ。

しかも実際始まったら石井さんの働きがすごく大きくて、何気ない雰囲気づくりですけれど、しっかりと目配りしながら、こういう言い方はちょっとまずいとか、ここにこんなものがあるのはちょっとまずかったとか、掃除の仕方がちょっとまずいとか、ものすごく気を遣っている。

子育て支援というのは相当専門知識性の高い仕事なんです。それをさりげなくやっているといるところ、石井体制の力というのが発揮されているんだと思うんです。つまり、ああいう場をつくれれば必ずうまくいくというふうにはあまり思っほしくないところは

あるんですよ。

○山路 最後によりよきものにしていくためにどうするべきか。子育て支援のニーズは潜在的にはもつといろいろある。「ころころの森」がある程度は応えてきたというところはもちろんあると思うけれど、よりよいものにしていくために、「ころころの森」の課題は何でしょうか。

○杉山 僕は関わる人のアイデアとか支援を具体的にしていくことかなというふうに思います。専門の人も専門でない人も、とにかくいろんな人が関わる形がいいのかなと思います。

○山路 そこが大学が一つの特徴を出せる場所ですね。小林先生、いかがですか。

○小林 そうですね。学生の参加ということで、最初はちよつと学



山路教授

生の参加が危惧されていた部分があったんですけど、今は逆にそれを有効な形でむしろ受け入れてくれている。学生がいてくれたからよかったという形で。

学生たちは、気持ちはあるけれどどうしていいかわからない。だから方向性をちゃんと示せば、みんな喜んで「ころころの森」に行つて、子どもたちにもふつと関わる。子どもたちも実はちゃんとわかるんですよ、自分のことをわかつてくれる人たちのことが。

みんながその子に目をかけてくれているという気持ちがあると、全然違ってくるんだろうと思います。

そういう意味で、学生も含めて専門性を持ち込んで、子育てをみんなで作るといふことがどんどん広がる方向になっていくといいなと思います。

○山路 鈴木さん、いかがですか。

○鈴木 この間はアンケートでも学生さんを使わせていただいて、学生さんたちが、お母さんたちの子育てがいかに大変かがよくわかつて面白かった、お母さんたちがすごく大変なこともわかったようです。学生さんたちの反応も面白いというか興味深かったし、お母さんたちも学生さんが関わっていることをすごく好意的に受けとってくれた。

課題は、私は市とNPOとの間に入っているので、そ

ことの兼ね合いがいますごく大きい問題だなというふう
に思っています。バランスの問題をどうしていくか。

○山路 行政との関係ですか。

○鈴木 行政との関係というか、求められるバランス
ですね。

○山路 石井さん、最後に一言。

○石井 やっぱり初心を忘れないということでは、いっ
ぱい来てくれていることに鈍感になつてはいけないな
と思つています。本当に初めて勇気を持つてやつてく
るお母さんたちがいるんだというところをいつも心に
留めていこうと。

今は新しく来た方にはこういう目印をしてもらうよ
うにしているんです。というのは、入っちゃうとなか
なかわからないんですが、初めてのお母さんにはわか
るようなものを付けてもらつて、その人には、本当に
勇気を持つて来てくれたこと、また、そのお母さんが
なぜここへ来たのかということを思いやりながら、そ
のお母さんに暖かい声をかけていくという配慮をして
いくことが大事だと思つています。「本当にようこそ来
てくださいましたね」という思いが伝わるようなそう

いうような配慮ですね。

ああいうところは生身なのでどんどん動いていくん
ですね。いまいからといって、それが続くかという
とわからない。その原点は何かといえ、スタッフだ
と思つています。ですから、スタッフの研修をできる
だけやれるようにしたい。

いま見ていると、気が緩んだり、慣れで変わってい
るのをピンピン感じるんですね。そのときに、スタッ
フにはどう気持ちよくやつてもらえるかに配慮し、チー
ムワークを尊重していくということが、支援の質を高
める。いろんな親が来るんだから、いろんなスタッフ
の個性を認め合うような関係づくりをしていかないと、
迎え入れる側が、あの親が、この親がということを選
別をしてしまう。

私たちは人間ですから好き嫌いがあつてもしょうが
ないんだけど、でも、本当にそれでいいのかという
ことを、いつも振り返れるような、そういう集団を保つ
ていくことが大切だと思つています。

私も悩むことが多いですが、スタッフ同士でもいろ
んな欠点が見えてくるし、そのところ、みんなが
ストレスを発散すると気分がいいから、そういうふう
になりやすいというのは日々感じる、本当にいい
空気があるのになければ、来た親はすぐ敏感に通じる
から、そういう質の高い、そんな人を受け入れるよう

な人間関係をスタッフの中でつくっていかないといけないのかなと思いますごく強く感じています。

○山路 わかりました。では、汐見先生、最後に締めくくりを。

教育・研究にどう生かすのか

○汐見 こういう施設が、孤立して悩みながらストレスいっぱいの子育てをしているお母さんなりお父さんにとつてどれだけ大事な施設かということは、私たちも実証してきたような感じがしますけれども、子どもたちの育つ環境を考えると、年々貧困になっているんですよね。

きょうも少し出ましたけれど、例えばワークシヨップというのは、さまざまな経験と出会うことで、子どもたちの中のものキラキラ光りだしてくるというようになことだと思えます。そういうものをもっと多様に僕らが開発していかなきゃいけない。

積み木なんかはたくさんあるけれど、その積み木も十分活用されていないというか、小さな子には積み木は難しいかもしれない。そうすると、それに代わる何か、新しいワークシヨップがあつて、それで子どもがどんな変わってきたというものが開発されていくという

ふうになつて、「ああ、さすがに大学がやっているものだ」となつていくような感じがするんですね。

そういうことをみんなで共同研究していくぐらいのスタンスでやればいいなと。それが定期化されれば、全国のこういうことをやろうとしているところにもサンプル程度にはなつていくと思うので、課せられていることはまだまだ大きいというふうに自覚してやりたいなと思いますね。

○山路 大学としても絶えざる検証・工夫をしていかなきゃいかんということですね。それを教育・研究にも生かしていくと。

○汐見 やっぱり研究的にやっていくことがないと大学ではないですね。

○山路 ひき続き我々も頑張っていきたいということで、この座談会を終わりたいと思います。きょうはありがとうございました。